

客観テスト (TOEIC Listening & Reading IP) 分析

—英語教育の成果及び今後の課題と展望

山本 幹樹・久保 幸貴

The Objective Test (TOEIC Listening & Reading IP) Score Analysis —Results of English Education, Challenges, and Prospects

YAMAMOTO Miki · KUBO Kouki

1. はじめに

本学のキャリア・イングリッシュ専攻では管理台帳『ルーテルVISION 2020』に基づき、「グローバルな人材の育成」を目指して英語教育を展開している。

『ルーテルVISION 2020』において、本専攻は、2024年度の間評価を次のように示している。

「1) 各種データ (前期・後期末に実施する初期配置テスト、授業成績、TOEIC L&Rスコア) を活用した学生配置の検討。新入生プレースメントテストの再評価—4つの言語スキルにより適切なツールを見つける。」
「2) TOEIC IPスコアを含む4技能測定テストによる学生の英語力の経年変化を分析し、学生指導を見直し、TOEIC IPスコア全体の向上を図る。」¹

上記を遂行するために、本学で導入している客観テスト (TOEIC Listening & Reading (L&R) IP) スコア分析を行った。その結果を示すとともに、今後の英語教育への展望についての示唆となればと思う。

2. 本学における英語教育とTOEIC IPの実施について

キャリア・イングリッシュ専攻では、必修科目として1年次にリーディング&ライティング演習Ⅰ及びⅡ、2年次にリーディング&ライティング演習Ⅲ及びⅣを履修する。本授業では主に英語のリーディングとライティングを学習する。2クラスを設定し、

上位クラスと通常クラスとに分けている。習熟度により、英語教育アプローチを変えたほうが、効果的と思われるためである。特に通常クラスには、理解のために丁寧な指導が必要となるため、少人数 (15~20人程度) のクラス設定で行われている (ただし、2024年度1年生は入学者数の関係上1クラスで実施されている)。本専攻は、リーディング&ライティング演習以外の授業でも、少人数クラスを設定し、できるだけ一人一人の学習到達度に沿った指導教育を行っている。

本学実施のTOEIC L&R IP試験は全学生が対象であり、希望する者は誰でも受験することができる。特に、本専攻では学習成果を測る一環として1、2年次には全員が受験することになっている。3年次以降は希望者が受験する。TOEIC L&R IPはTOEIC L&R公式試験と同形式で、大学が独自の日程を設定して試験を実施することができる。本学では毎年7月と1月に年2回試験を行い、リーディング&ライティング演習の成績評価にも用いられている。テストは大きく分けてリスニングとリーディングの二つのパートからなり、リスニングパートはPart 1からPart 4までの問題が100問、リーディングパートはPart 5からPart 7まで100問となる。問題は合計200問で試験時間は2時間という、大規模で信頼性の高い試験となっている。また、就職に際しては、TOEIC (IP含む) L&Rで一定以上の得点を取得していることを条件とする企業組織もあるため、高得点を取っておくと就職の際にも有利である。

TOEIC (IP含む) L&Rテストの信頼できる点は、同様の英語レベルの受験者が何度受験しても、ある

一定の同じスコアが算出される点である。ただし、注意しなければならないのは、測る能力がリスニング及びリーディングのみであり、スピーキング及びライティングはTOEIC (IP) S&Wを受験する必要がある。またスコアはリスニングセクション、リーディングセクションで誤差がそれぞれ±35点ある²。ある程度の差異が生じるため、その範囲以内でスコアが上下しても、実際はあまり変化がないということになる。

3. 客観テスト (TOEIC L&R IP) 分析・考察

TOEIC L&R IPは前期7月と後期1月の2回、学内で実施される。得られたスコアデータの詳細はTOEIC®プログラムの運営を行うIIBC（一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会）より、実施団体へ提供される。受験者は、その旨を承諾した上で受験することになっている。また、今回データ

を分析するにあたり、キャリア・イングリッシュ専攻主任からの承諾を得た。受験者のスコアデータについては、対象者にデータの使用目的・使用範囲・承諾を拒否しても一切の不利益が生じないことを説明したうえで、承諾が得られたデータについてのみ活用している。

承諾が得られたものの内訳は以下の表1の通りである。

今回のデータ分析の目的は、以下について明確にすることである。1. 習熟度別クラス分けが妥当か。2. 経年変化がどのように見られるか。3. 結果を受けて、どのような英語教育アプローチが望ましいか、あるいは可能か。以下の項目で詳細を述べたい。

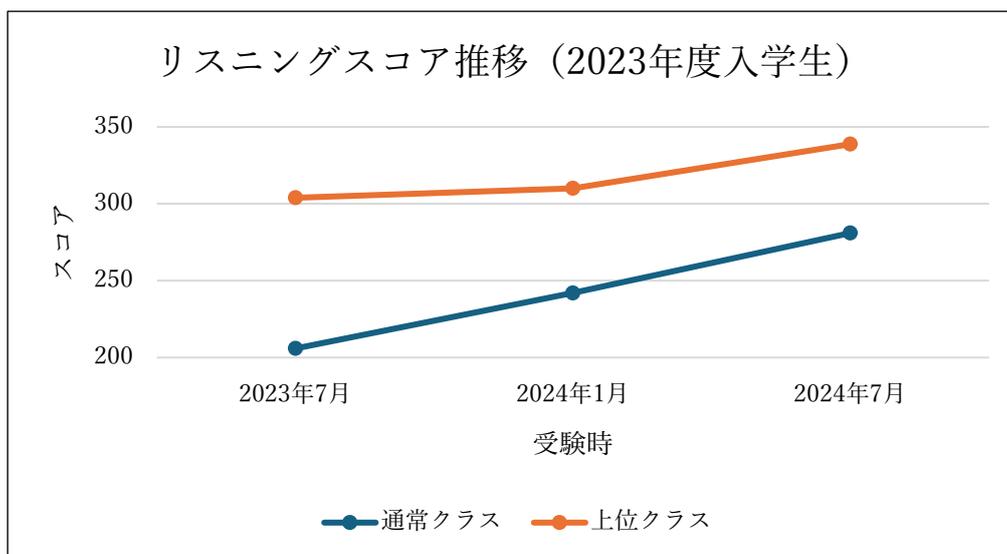
3.1. クラス別スコアの平均について

グラフ1～3は2023年度前期から2024年度前期までに行われたTOEIC L&R IP試験における2023年度入学生の平均スコアの推移を示している。リスニングセクション、リーディングセクション共に平均スコアは上昇を見せている。

【表1】実施日ごとのTOEICデータ活用の承諾数

実施月	2023年1月		2023年7月		2024年1月		2024年7月	
	RW2	RW4	RW1	RW3	RW2	RW4	RW1	RW3
通常クラス	7	6	5	8	5	9	22	5
上位クラス	10	4	9	11	12	13		8

RW1などは授業科目「リーディング&ライティング演習Ⅰ」などを表す。



【グラフ1】2023年度入学生のリスニングスコアの推移

縦軸はスコア、横軸は試験を実施した時期を表す。

リスニング平均スコアは2023年度7月受験時点で通常クラスは206点（495点満点、端数は切り捨て）、入学後約1年の2024年1月受験時点は242点、1年後の2024年の7月時点は281点であった。一方、上位クラスのリスニング平均スコアは2023年度7月時点で303点、1月時点で310点、2024年度7月時点では338点であった。リスニングスコアは、特に上位クラスにおいて、1年後（2024年1月時点）よりも1年半後（2024年7月時点）の伸び幅が大きくなっている。スコアアップにはある程度時間をかける必要があることを示唆しているかもしれない。

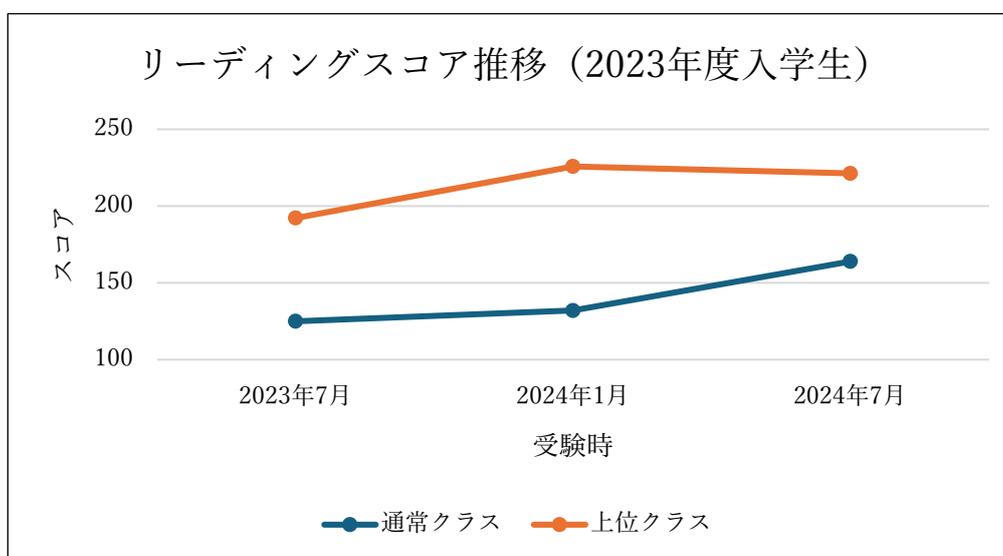
リーディングセクションは、上位クラスは2023年7月から2024年1月の間にスコアが大きく上昇した一方で通常クラスは2024年1月から2024年7月の間に大きくスコアが上昇している。スコア平均点はそれぞれ通常クラスは2023年度7月時点は125点（満点は495点）、入学1年後の1月時点では132点、1年半後の2024年度7月時点は164点と上昇を見せている。上位クラスも2023年7月時点では192点、1月時点では225点と上昇し、2024年度は221点とほぼ横ばいとなった。半期間での上昇率が大きい1、2年次の授業であるリーディング&ライティングの中で長文に触れる機会が多いことも、得点の上昇につながっていると考えられる（グラフ2）。

グラフ3はリスニングとリーディングのスコアを合計したトータルスコアの平均推移を表している。通常クラスは2023年度7月時点では331点、入学約1

年後の1月時点では374点、入学後1年半の2024年度7月時点では445点であった。また、上位クラスは2023年度7月時点では496点、1月時点では535点、入学後1年半の2024年度7月時点では560点であった。平均スコアが習熟度クラスによって異なっているが、クラス分けが妥当であることが言えるだろう。また、スコアは時間を追うごとに上昇しているため、入学後1年半以降のスコア推移にも目を向けていく必要があると思われる。今後2年後以降の追跡調査および他の入学年度の学生たちの傾向の確認を行っていくことを課題としたい。

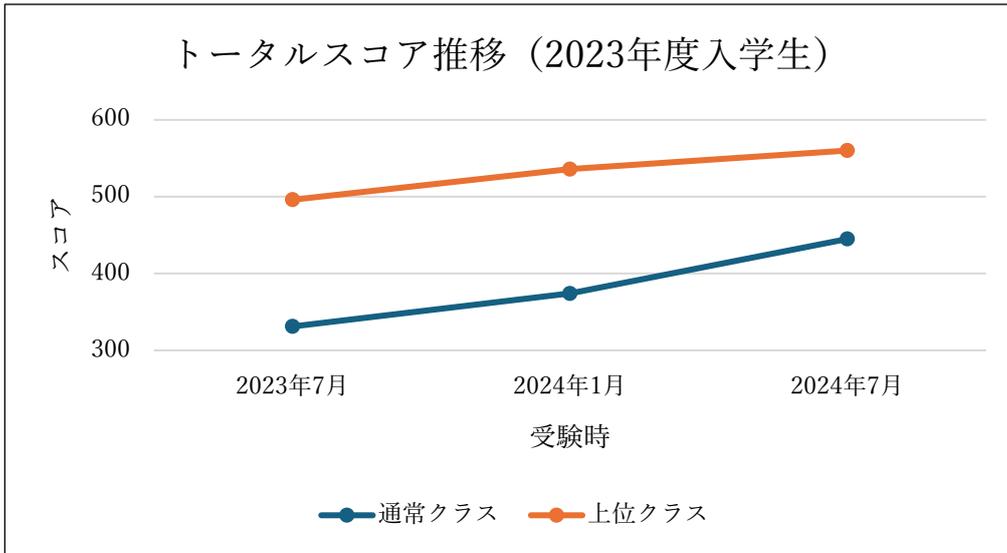
本学と全国平均を比較すると表2、表3のようになる。リスニングセクションは入学後半年の7月時点で、通常クラス平均は206点、1月時点で242点、上位クラスは7月時点で303点、1月時点は310点であるのに対し、全国平均は大学1年生252点、英語専攻の1年生は277点であった。また、2年次となる2024年7月時点の通常クラス平均は281点、上位クラスは338点であるのに対し、2年生の全国平均は264点、英語専攻の2年生は304点であった。本学の上位クラスは全国平均よりやや高い水準である。

リーディングセクションは通常クラス入学後半年の7月では125点、1月は132点であった。上位クラスは7月時点では192点、1月は225点であった。全国平均は1年生は201点、2年生は204点、英語専攻の1年生は207点、2年生は227点であり、本学の通常クラスは2024年7月の受験時点では全国平均よ



〔グラフ2〕2023年度入学生のリーディングスコアの推移

縦軸はスコア、横軸は試験を実施した時期を表す。



【グラフ3】2023年度入学生のトータルスコア（リーディング+リスニング）の推移
縦軸はスコア、横軸は試験を実施した時期を表す。

り低めで、上位クラスにおいては2024年1月受験から2024年7月の受験時点までは全国平均以上ではあるが英語専攻の平均と同程度ということになる。本稿の執筆は2024年9月であるが、2025年1月予定のTOEIC L&R IP試験までの期間にどのような指導・教育や学習を行うかによっても平均値や伸び幅が異なってくると思われる。この結果を専攻内で共有し、更に英語教育に力を入れていきたい。

【表2】本学と2023年度全国の大学生受験者とのリスニングスコアの平均値の比較³

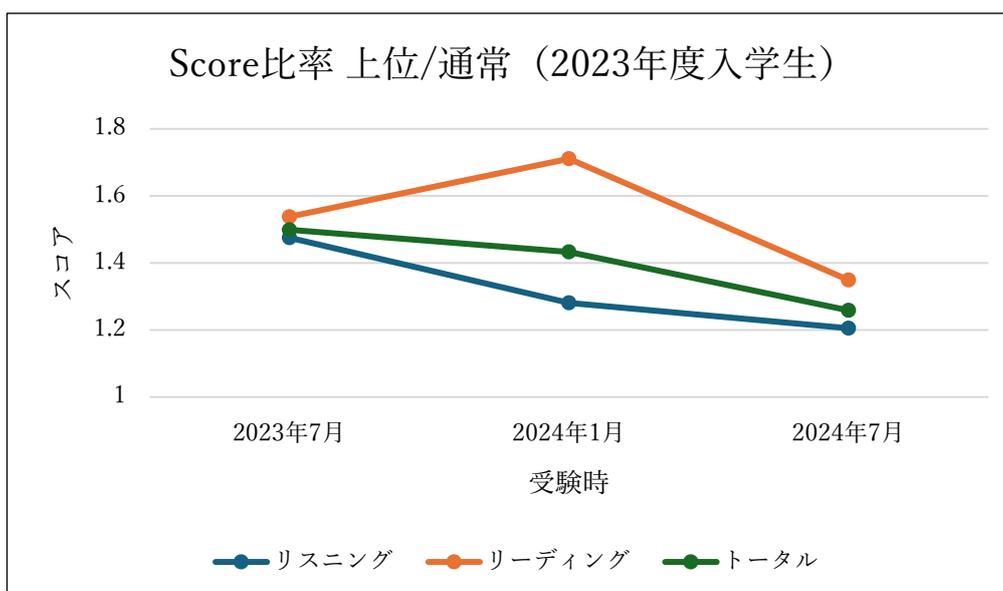
	大学1年		大学2年	
全国平均	252		264	
英語専攻平均	277		304	
	2023/7	2024/1	2024/7	2025/1
通常クラス	206	242	281	
上位クラス	303	310	338	

【表3】本学と2023年度全国の大学生受験者とのリーディングスコアの平均値の比較³

	大学1年		大学2年	
全国平均	201		204	
英語専攻平均	207		227	
	2023/7	2024/1	2024/7	2025/1
通常クラス	125	132	164	
上位クラス	192	225	221	

グラフ4は2クラスの平均スコアの比率（上位クラスの平均得点÷通常クラスの平均得点）がどの程度か、またその推移を表している。この値が1よりも大きくなるほど上位クラスと通常クラスの得点の差が大きく、1に近いほどクラス間の得点の差が小さいことを示している。入学半年後は開きが見られるが、興味深いことに1年半後には上位クラスと通常クラスの間平均スコアの差異が小さくなっていることが示されている。つまり、通常クラスが追い上げているということになる。このことは、ある程度高い得点を取るようになると、その後の伸び幅が一旦停滞するためであると考えられる。スコアの伸び悩みは都度生じるもので、その点を加味する必要がある。これで悩む学生も多いが、学習を継続することで、必ずブレークスルーがあると励ましている。また、受験の初期段階ではスコアが大幅に伸びる可能性があるとも言える。このことは特に通常クラスのモチベーションを醸成するのに役立つ可能性がある。例えば受験の結果を学生に返却する際に、その回の結果だけを返却するのではなく、学生ごとに試験の結果の推移をまとめた資料を配布するといったような取り組みが有効かもしれない。自身の成長を実感させることで意欲の向上に繋がる効果が期待できる。

なお、本分析は2023年度入学生に着目して経年の変化を追ったものである。そのため統計的な揺らぎや学生の入学年度の特徴などによって大きくその結



【グラフ4】2023年度入学生のクラス間の平均スコア比率（上位クラスの平均得点÷通常クラスの平均得点）の推移
縦軸はスコア比率、横軸は試験を実施した時期を表す。

果が影響を受ける可能性は否めない。より確度の高い分析を行うためにはさらに多くのデータによる検証が必要となるだろう。

3.2. 項目別平均点に関する分析

TOEIC（IP含む）L&Rは受験すると、認定証が発行される。そこには、個々の受験者の得点状況の詳細が記載されている。単にスコアのみでなく、詳細な能力について10項目に分類され、その得点率がどの程度かが示されている。そこで、個々の得意、不得意が明確になり、今後の英語学習に役立てることが可能である。

以下に、項目を挙げる。

〈リスニングパート〉

- L1. 短い会話、アナウンス、ナレーションなどの中で明確に述べられている情報をもとに要点、目的、基本的な文脈を推測できる：TOEIC問題 Part 1 & 2が該当
- L2. 長めの会話、アナウンス、ナレーションなどの中で明確に述べられている情報をもとに要点、目的、基本的な文脈を推測できる：Part 3 & 4
- L3. 短い会話、アナウンス、ナレーションなどにおいて詳細が理解できる：Part 1 & 2
- L4. 長めの会話、アナウンス、ナレーションなどに

おいて詳細が理解できる：Part 3 & 4

- L5. フレーズや文から話し手の目的や暗示されている意味が理解できる：Part 2 & 3 & 4

〈リーディングパート〉

- R1. 文書の中の情報をもとに推測できる：Part 7
- R2. 文書の中の具体的な情報を見つけて理解できる：Part 7
- R3. ひとつの文書の中でまたは複数の文書間でちりばめられた情報を関連付けることができる：Part 6 & 7
- R4. 語彙が理解できる：Part 5 & 6 & 7
- R5. 文法が理解できる：Part 5 & 6

各項目の得点率の平均を学年ごとに算出した。

表4～表7は2022年度後期、2023年度前期、後期、2024年度前期に行われたTOEICテストの各クラスの項目別の平均正答率を表している。顕著と思われるのは、リスニングパート「項目3」で短い文の詳細を問う問題の正答率が70パーセントを超えているあるいは70パーセントに近い点である。また、リーディングパートでは「項目4」や「項目5」、つまり語彙や文法を問う問題が高い傾向にある。逆に、リスニングパートでは「項目5」が、リーディングパートでは「項目1」が低い傾向にある。明確な情報

を拾うのではなく、会話や文の前後の文脈から推測して回答を行う必要のある項目が苦手ようである。

2024年度は入学者数の関係上上位クラスと通常クラスに分けられていないため1クラスのみである。

表8は上記項目別正答率が、クラスによって差異が見られるかを分析したものである。大きな差異がみられるものがいくつも散見されるものの、受験回ごとに違った項目に大きな差異が表れており、毎回

確認できるような傾向は見られなかった。このことは各項目の正答率の差は入学年度や受験回によって表れ方が異なっているため、この指標だけを見てクラスの得手不得手を推し量ることは困難であることを意味している。

[表4] 2022年度後期の項目別正答率⁴

2022後期	L1	L2	L3	L4	L5	R1	R2	R3	R4	R5
RW2N	53.4	42.9	64.3	51.6	39.3	32.9	43.6	37.9	44.7	33.3
RW2U	55.2	49.5	77.0	54.4	45.9	42.0	42.6	41.7	51.4	56.3
RW4N	46.7	50.0	72.2	55.0	35.5	37.2	40.2	30.7	49.8	44.3
RW4U	66.8	62.5	84.8	76.0	55.0	47.5	57.8	52.5	59.0	58.3
総計	54.6	49.8	73.8	57.0	43.2	39.4	44.6	39.9	50.4	48.0

[表5] 2023年度前期の項目別正答率⁴

2023前期	L1	L2	L3	L4	L5	R1	R2	R3	R4	R5
RW1N	50.0	33.4	70.6	42.6	38.8	22.8	30.4	32.8	32.6	46.2
RW1U	59.8	60.8	81.6	64.1	51.9	32.0	40.9	44.8	46.4	63.8
RW3N	46.3	44.1	73.4	53.1	35.9	35.3	50.0	38.8	37.9	53.9
RW3U	52.9	49.1	76.8	51.7	43.0	30.7	50.4	42.0	41.1	60.8
総計	52.7	48.7	76.3	54.1	43.1	31.0	44.7	40.6	40.5	57.7

[表6] 2023年度後期の項目別正答率⁴

2023後期	L1	L2	L3	L4	L5	R1	R2	R3	R4	R5
RW2N	47.4	49.4	64.0	54.6	48.2	27.2	30.8	38.2	32.8	54.0
RW2U	63.8	58.4	78.3	67.8	53.4	46.0	45.1	48.7	55.3	66.3
RW4N	48.9	54.2	77.1	64.3	40.1	39.1	41.0	37.2	40.0	58.9
RW4U	59.2	60.7	77.2	70.1	49.2	50.2	42.0	46.5	49.8	70.4
総計	56.7	57.1	75.8	66.1	48.3	43.4	41.3	44.0	47.1	64.4

[表7] 2024年度前期の項目別正答率⁴

2024前期	L1	L2	L3	L4	L5	R1	R2	R3	R4	R5
RW1	60.0	59.0	88.0	58.0	60.0	61.0	63.0	64.0	75.0	57.0
RW3N	62.6	48.4	66.4	60.4	40.0	42.8	37.8	41.6	39.2	31.6
RW3U	62.5	63.5	77.3	70.0	53.4	42.9	54.0	46.4	50.1	53.4
総計	62.4	57.8	74.1	65.7	49.1	44.1	48.9	45.9	48.0	45.9

〔表8〕項目別正答率の上位クラスと通常クラスの比較

	上位クラスと通常クラスの正答率の差(上位-通常)										上位クラスと通常クラスの正答率の比(上位/通常)									
	L1	L2	L3	L4	L5	R1	R2	R3	R4	R5	L1	L2	L3	L4	L5	R1	R2	R3	R4	R5
2022年度後期																				
RW2	1.8	6.6	12.7	2.8	6.6	9.1	-1.0	3.8	6.7	23.0	1.0	1.2	1.2	1.1	1.2	1.3	1.0	1.1	1.1	1.7
RW4	20.1	12.5	12.6	21.0	19.5	10.3	17.6	21.8	9.2	13.9	1.4	1.3	1.2	1.4	1.5	1.3	1.4	1.7	1.2	1.3
2023年度前期																				
RW1	9.8	27.4	11.0	21.5	13.1	9.2	10.5	12.0	13.8	17.6	1.2	1.8	1.2	1.5	1.3	1.4	1.3	1.4	1.4	1.4
RW3	6.7	5.0	3.4	-1.4	7.1	-4.5	0.4	3.3	3.2	6.9	1.1	1.1	1.0	1.0	1.2	0.9	1.0	1.1	1.1	1.1
2023年度後期																				
RW2	16.4	9.0	14.3	13.2	5.2	18.8	14.3	10.5	22.5	12.3	1.3	1.2	1.2	1.2	1.1	1.7	1.5	1.3	1.7	1.2
RW4	10.3	6.5	0.1	5.7	9.1	11.0	1.0	9.3	9.8	11.5	1.2	1.1	1.0	1.1	1.2	1.3	1.0	1.3	1.2	1.2
2024年度前期																				
RW3	-0.1	15.1	10.9	9.6	13.4	0.1	16.2	4.8	10.9	21.8	1.0	1.3	1.2	1.2	1.3	1.0	1.4	1.1	1.3	1.7

左は差を取ったもの、右は比を取ったもので、どちらもより大きな値ほど濃い色で表されている。

4. 分析まとめと今後の英語教育の可能性

結果を踏まえて、以下のことが提案できると思われる。どちらのクラスも時間を追うごとにスコアの上昇を見せていることから、引き続き習熟度別に丁寧な教育・指導を行っていく必要があると思われる。

また、リスニングパートではPart 1及びPart 2の正答率が高いことから、短い文であれば正確に情報をつかむことができると言える。学生はそのことに自信をもって取り組んでもらいたいし、教員も徐々に長い文をリスニングできるようになるような指導をしていくと効果的であると思われる。それには、身近で楽しめるような動画・映画や楽曲などを英語教材として活用すると、長時間のリスニングもできるようになり、英語を視聴する体力もついてくるだろう。

リーディングパートでは、語彙や文法が比較的的理解できている点について注目したい。特に文法は苦手意識を持つ学生が多いが、得点率は他の項目よりやや高いため、この点について注目してもらい、自信につなげたい。文法や語彙の理解が進むと、長文にも対応ができるようになるため、こちらも身近な教材を活用して、学習自体を楽しんでもらいたいと思う。

苦手分野を見てみると、リスニングパートでも、リーディングパートでも、会話を聴いてあるいは文章を読んで推測するという点が弱点のようであるが、これは、読む・聴く活動を頻繁に行うこと、まずは

短文から少しずつ理解の幅を広げていくことで、獲得していけるのではないかとと思われる。

語学学習はすぐに効果が出るものではなく、中断するとすぐに低下してしまう。効果を実感するまで地道な努力が必要となる。そのためには苦手分野より、得意分野を伸ばす方が英語学習には効果的なのではないか、という一つの仮説を挙げたい。得意分野は効果的な学習方法を自らが探り易く、また継続が可能と思われるからである。このことを、今後の授業で検証を行っていきたいと考える。

注意すべきは、学内実施のTOEIC L&R IPはリスニング及びリーディングの能力について測る試験である点である。スピーキング及びライティング、コミュニケーションの能力はここで測ることができないので、TOEIC L&R IPの点数のみで英語活動に不可欠な全ての能力の現状を把握できるわけではない。例えば、2023年度の3年次の「特別研究（ゼミ）」では、英語ネイティブ教員を希望する学生が例年より多く見られた（2022年度は12名、2023年度は17名）。「特別研究」の履修者は、同じ教員の指導の下、4年次の「卒業研究」を履修し卒業論文を書くことになる。つまり、英語で卒論を書きたいと考える学生が増えたということになる。これは、授業内外でライティング教育や学習が積極的に行われた結果ではないかと考えられる。しかし、このことをTOEICスコアからは読み取ることはできない。

また、TOEICのスコアを上げることのみが、本学の英語教育の最終目標というわけでもない。スコア

を上げるためには、ある種のテクニックを要する面があるからである。テクニックを教授するようなTOEIC学習向けの問題集は何冊もある。例えば、リーディングパートは読む範囲を絞る練習を促すようなものであったりするが、これは、試験自体で75分では到底読み終われないような量の英文が出題されているためである。もちろん、ビジネスシーンでは短時間で正確な情報をつかみ取る能力が要求される。しかし、正答の根拠となる部分のみ拾うような練習を続け、正答率を上げることにこだわり過ぎると、結局「いかに読まないか」の方が重要となってしまう。それは本来の英語教育とはやや乖離するようと思われる。じっくり読んで考察する活動のなかで、本来の読解力は培われるからである。

本専攻の目的は、授業や学習活動を通して、読む、聞く、書く、話す、コミュニケーションを取るといった全ての活動を総合的に向上させ、また、異文化理解を深め、グローバルに活躍できる人材を育成することである。TOEICのスコアが多少振るわなくても、コミュニケーション能力に長けている学生がいることもあり得るし、その学生の方が将来的に世界で活躍できる可能性すらある。

つまり、TOEICスコアは決して万能ではないということ、されど日本の社会はTOEICスコアが重視されているということは、頭の隅に置いておかねばならないと考える。結局のところ、TOEICの高いスコアを獲得しそれを何に役立てるのか、あるいは自分が何をするのか、が重要である。

一方で、TOEICスコアを上げたいという学生のモチベーションは大切にしたいと考える。TOEIC L&Rに織り込まれた問題は、実社会で登場する場面のものばかりで、問題内容自体を活用して、実践力を鍛えることが可能と思われる。そのことが結果として、TOEICスコアのみならず、4技能+コミュニケーション能力も総合的に上げる結果となるだろう。本専攻はリーディング&ライティング演習の他にも、コミュニケーション・イングリッシュやその他の多彩な英語授業を展開している。今後の課題として、TOEIC L&R IPのスコアと、リーディング&ライティング演習やその他の科目の成績が相関するののかについても分析を行っていくと、興味深い結果が見られるかもしれない。

5. 註

- 1 一部改変を行っている。
- 2 ETS. (2022). “Score User Guide — TOEIC® Listening & Reading Test, Paper Delivered.” p.14.
<https://www.ets.org/pdfs/toeic/toeic-listening-reading-score-user-guide.pdf>
- 3 全国及び英語専攻の平均は2023年度全国平均『TOEIC Program DATA & ANALYSIS 2024 : 2023年度受験者指数と平均スコア』(p.8) より引用
- 4 L1~R5は本文中で挙げた10項目能力を示す。RW1N, RW2Uなどはリーディング&ライティング演習の所属クラスを表し、Nは通常クラス、Uは上位クラスを表している。各欄の数値は正答率の平均値を示している。

6. 参考文献

- Educational Testing Service (ETS). (2022). “Score User Guide — TOEIC® Listening & Reading Test, Paper Delivered.”
<https://www.ets.org/pdfs/toeic/toeic-listening-reading-score-user-guide.pdf>
- 九州ルーテル学院大学. (2020-2024). 「九州ルーテル学院大学管理台帳『ルーテル VISION 2020』」.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (2023). 『TOEIC Program DATA & ANALYSIS 2023 : 2022年度受験者指数と平均スコア』.
<https://www.iibc-global.org/hubfs/library/default/iibc/press/2023/p227/2023DAA.pdf?hsLang=ja>
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (2024). 『TOEIC Program DATA & ANALYSIS 2024 : 2023年度受験者指数と平均スコア』.
https://www.iibc-global.org/hubfs/library/default/toeic/official_data/pdf/DAA.pdf?hsLang=ja

7. 倫理的配慮

本研究は個人情報及び倫理面に配慮して行った。TOEICデータの使用に際しては学生に使用目的・使用範囲、許諾を拒否しても一切の不利益が生じないことを説明し、個別に許諾を得られたもののみを使用した。同時に、掲載についてキャリア・イングリッシュ専攻主任の許諾を得た。また、利益相反関係はない。